



太平洋諸島リンパ系フィラリア症 制圧(PacELF) : 疾病制圧事業成功 の要因とカギを探る

2017年11月25日(土) 9:00~10:30

第4会場 (1号館講堂 NC309)

【概要】 1999年3月パラウで太平洋大臣会議が開かれ、太平洋諸国からリンパ系フィラリア症(LF)を制圧しようという合意がなされ、世界に先駆けて、太平洋リンパ系フィラリア症制圧計画(PacELF)とよばれる疾病制圧事業が始まった。

PacELFは太平洋諸国22か国および地域が参画する疾病制圧事業であり、当初、LF蔓延国は16ヶ国であった。その後PacELFに続くように2000年にはWHO主導で世界リンパ系フィラリア症制圧計画(GPELF)が始まり、PacELFもGPELFの一環としてWHOのガイドラインに沿って制圧事業を展開している。現在、太平洋諸国の多くは集団薬剤投与を既に終了してLFの伝播を抑え、制圧承認に向けたサーベイランスを実行している。2016年にはバヌアツ、ニウエ、クック諸島が世界で初めてWHOから制圧承認を受け、2017年にはさらにトンガ、マーシャル諸島も制圧承認を達成した。他の国々も次々と制圧承認に向けて歩みを進めており、太平洋諸国はGPELFの中で最も早く、地域レベルでのLF制圧を達成すると見込まれている。

疾病制圧事業には、エビデンスに基づいた政策、指針を立て、それを基に実現可能な確かなガイドラインを作り、実施に必要な薬剤、ツール、資金、技術サポートを提供し、そして迅速かつ綿密なドナー・パートナー機関との協調と強い実施体制が必要である。

本シンポジウムでは、PacELFの枠組みと活動の成果をまとめた”PacELF Endgame project”を紹介するとともに、複数国を対象とした地域レベルでの疾病制圧事業の成功の要因とカギを検証し、日本のアカデミアが担うべき役割と貢献について考察したい。3名のシンポジストの先生方にご登壇いただく。まずWHOの矢島綾先生(WHO西太平洋地区NTD専門官)からWHOのNTD制圧対策活動の中でのPacELFの位置づけと貢献について講演をいただく。次に、国際協力機構(JICA)の金井要先生(技術審議役)にPacELFへの様々なJICA、JOCVの支援について紹介いただく。最後に、長崎大学熱帯医学研究所の平山謙二先生(所長)からこれまでPacELFに対して世界のアカデミアが果たした役割と貢献してきた事例を発表いただき、さらに今後、日本のアカデミアが疾病対策に貢献を強めていく意義と可能性について討議いただく。

LFは、顧みられない熱帯病(NTD: Neglected tropical diseases)の1つであり、その制圧事業の集団投薬、サーベイランス、象皮病患者へのケアの徹底といった活動は、SDGs達成の重要な課題である。本シンポジウムにぜひ参加いただき、地域・世界レベルでの疾病制圧事業の成功の要因とカギを探り、それに対する我が国の貢献、アカデミアの役割に関する論議を深めていただきたい。



座長：一盛和世

長崎大学熱帯医学研究所

NTDiセンター シニアアドバイザー
/ フィラリアNTD室 ディレクター

1. WHO NTD 制圧対策活動に
おける PacELF の位置づけ
と貢献

矢島 綾

World Health Organization,
Regional Office for Western
Pacific・NTD 専門官

2. PacELF への JICA/JOCV
の支援

金井 要

国際協力事業団・技術審議役

3. PacELF に対する日本の
アカデミアの貢献

平山 謙二

長崎大学熱帯医学研究所・所長